

基盤研究(S) 人種表象の日本型グローバル研究

研究分野：文化人類学・民俗学

キーワード：人種 人種主義 差別 差異 表象 科学言説

【研究の背景・目的】

本研究は、人種の表象と社会的リアリティをめぐってこれまで積み重ねてきた分野横断型・地域横断型の共同研究をさらに進化させ、その成果を国際的に発信することを目的とする。本プロジェクトで特に注目するのは以下の2点である。

- 1) 欧米の植民地経験に基づいた人種の「視覚表象」の分析だけではなく、日本・アジアに存在する「見えない人種」をめぐる「非視覚表象」、さらに「科学表象」、「自己対抗表象」をも取り上げ、それらがどのように互いに接合し、人種の社会的リアリティが生成されるのかを検証する。
- 2) 人種表象のグローバルな波及・ローカルでの変形および抵抗運動のトランスナショナルな連帯に焦点を当てる。なお「日本型」には、日本に研究基盤を置く研究者を中心に国際発信をする、つまり主体性を明確にする意味と、顔を合わせた共同研究会を頻繁に行うといった、日本の学術コミュニティの特性を活かすという意味を込めている。

【研究の方法】

本研究の根幹をなすのは、代表者が京都大学人文科学研究所において年間約10回以上主宰する共同研究会である（原則1回2報告、約5時間、HPで案内する公開研究会を含む）。このほか大規模な国際シンポジウムを5年間で複数回、小中規模の国際会議を年数回、公開セミナーを年数回行う。これらの会合へは分担者、連携研究者、国内の研究協力者が参加する。これらの各メンバーは、フィールドワークや資料収集、ゲノム解読などを行い、研究会や公開セミナーでの報告を通して、発見や課題等を全員で共有する。他方、国際交流・国際発信に今まで以上に力を注ぎ、これまで共同研究を行った海外の専門家を再度招聘し議論を深める。

【研究の意義】

21世紀の課題は、19世紀や20世紀前半型とは異なる「見えない人種主義」である。本研究は、先行研究で多く扱われてきたアフリカ系や先住民などだけではなく、被差別部落やコリアンなど「見えない人種」をめぐる表象も含めることによって、他地域におけ

る「見えない人種」の表象をも逆照射する。欧米の植民地経験に基づいて構築されてきた従来の人種研究と、日本・アジアの視点に基づく人種研究を、海外研究者らとの連携により接合させる。それによって、日本型グローバル研究の成果を日本から国際的に発信するものである。

【当該研究課題と関連の深い論文・著書】

2009 『人種の表象と社会的リアリティ』（竹沢泰子編）岩波書店 328p.

2005 『人種概念の普遍性を問う—西洋的パラダイムを超えて』（竹沢泰子編）人文書院 550p.